おいでなして＋日赤だより 60

医療を通しての社会貢献

私たちの生活の中で出合う病気やアレルギー症状、けが。病気予防や、かかったときの対応などについて、諏訪赤十字病院の医師の皆さんらに、原稿を寄せていただくコーナーです。毎月第2火曜日に掲載します。

60回目は、増澤正裕副院長兼事務部長です。

えっ、日赤が危ない!?

1999年に諏訪市小和田からここ湖畔の地へ新築移転後間もなく、当院に今まで経験のない経営危機が訪れました。「紹介状がないと診(み)れません」「ある程度病状が回復したら転院してもらいます」…今では住民の皆さんに理解いただいている台詞も、当時は「何て敷居の高い病院なの!」「病院から追い出すのか!」と大変痛烈なご批判とご意見をいただきました。病院の考えを一方的に押し付けたのかもしれません。当然のごとく患者さんは離れ、必然的に経営は右肩下がりで傾き出したのです。

もう腹をくくるしかない

「日赤がつぶれるはずはない」当時、職員はもとより地域の皆さんも楽観視していましたが、日赤は公立でもなく民間組織ですので、独立採算による経営形態をとっています。従って経営が悪化すると日赤本社からは、なりふり構わず締め付けが厳しくなり、医療機器の購入や職員の採用など何をやるにもお伺いが必要でした。こうした金縛りの状況が少なからず職員にも伝わり、何人かの職員は将来の不安を感じてか、他の医療機関へ転職するなど院内に動揺が走るようになりました。

2005年4月に下諏訪町出身で二つの県立病院を再建した現名誉院長の小口壽夫氏を病院長に招聘(しょうへい)し、我々も退路を断っての経営改善に着手しました。ここに至るまでも経営改善は試みてはみましたが、本気度が足りなかったのか結果が伴うことなく、院内に閉塞感が漂っていたことは否めませんでした。

信頼回復に特効薬はありません

見る見るうちに組織が活性化し、職員もワンチームにまとまり劇的な変貌を遂げてゆきます。マネジメントを実践しながらいくつもの成功体験を通して職員が自信を回復し、同時に住民の皆さんとの良好なコミュニケーションが構築されるようになりました。まずは院内外で幾度となく開催した市民公開講座を通して病院の考えを粘り強く理解していただき、市民新聞さんはじめ多くのメディアを使ってのプロモーション活動にも力を入れました。マスコミへの露出度は瞬く間に高まり年間300件近く扱っていただくようになりました。また、広く病院を知っていただく機会として毎年病院祭を開催し、昨年は3千名近い住民の方に来院いただきました。ロビーを市民団体の皆様に活用いただくためコンサート会場として開放し、また60名を超える病院ボランティアの方と一緒に病院の美化や癒やしの環境を創出するなど、病院がコミュニティの場として認知された証しでしょうか。毎年夏に開催される諏訪よいてこへ100名を超える踊り連を繰り出し、御柱年には「健康一之柱」を職員、患者さん、地域住民の皆さんと一丸で力を合わせて曳行したりもしました。

こうした活動が奏功し経営はV字回復を図るとともに、医療の質も飛躍的に向上しました。救命救急センターとして諏訪地域で初の認定を受け、地域がん診療連携拠点病院として都会へ行かなくてもある一定のがん治療が受けられる水準を確立し、小児はじめ周産期や心臓、脳疾患などの拠点病院として、地域住民の医療と健康を守る一大組織に成長することができました。

患者さん目線で、そして患者さんファーストで地道に取り組んできたことが、地域の信頼と安心につながったと確信しています。

地域の皆さんと共に歩む

来し方行く末を思うに、当院のルーツは明治13(1880)年諏訪郡24カ村の総意により設立した公立高島病院に遡ります。その後大正12(1923)年に日赤(日本赤十字社)へ移管となり現在に至っています。将来にわたり140年の歴史と伝統に甘んずることなく、諏訪地域の先人の教えと温かく育んでいただいた皆さんの期待に応えてゆくことが大切と考えます。

医療はこの先、人口減少に伴う病院のダウンサイズや統廃合、急性期病床からの機能転換など不透明であり激変が予想されます。

諏訪地域の皆様の医療環境を守るためにも諏訪赤十字病院はその使命をしっかり果たすことをお約束し、拙い内容ではありますが筆を置かせていただきます。

私事ではありますが、この3月をもちまして諏訪赤十字病院を退職することになりました。この間、多くの皆様からいただきました励ましやご意見は、かけがえのない財産であります。

本当に長いことお世話になりました。ありがとうございました。

筆者プロフィール

増澤(ますざわ) 正裕(まさひろ)

1980年 諏訪赤十字病院入職
副院長兼事務部長
日本赤十字社東日本赤十字病院事務部長会会長
日本医療機能評価機構サーベイヤー
下諏訪町在住
趣味 齢50を過ぎてから始めた山登り(登った山は100座を超える)
写真撮影
松本山雅をこよなく愛す(サポーター歴10年)

(次回は4月14日付に掲載予定です)